頭上の響

北村四海

青空文庫

「君、如何だ、近頃は不思議が無いか」

私の友人は、よく私にこういうて笑うが、私には如何してもそれが冗談として打消されない、矢張何か一種の神秘作用としか思われないのである、如何いうものか吉兆の方は無い——尤も私の今日までの境遇上からでもあろうが——が奇妙に凶事に関しては、事件の大小を論せず、必ず自分には前報がある、遅いのは三四日前、早いのは一年も二年も以前にちゃんと解る、如何して知れるというと、即ち自分の頭の真上で何か響があるのだ、それにまた奇妙なのは、事件が大きければ大きいほど、響も大きいといった風で、瑣細な凶事が起る時などは、丸で何か爪の先で爬く様な微かな音がする、他人がもし傍に居ればその人にも聞えるそうだ、私はこういう仕事をしているから、もしそういう響を聞けば、直に家人は勿論、門弟一同に深く注意を与えて、前以て種々予防を為る、幸いそれで何も起らない場合もあるが、多くは何処か眼の届かなかった処とか、如何しても避けられぬ事、例えば他人から預っておいた彫刻品が、気候の為めに欠損が出来たとかいう様な、人力では、如何にも致方の無い事が起るのである、この談をすると、よく友人輩は一口に「君、それは鼠だろう」と貶してしまう、成程鼠の居るべき処なら鼠の所業かと合点もするが、鼠の居るべからざる処でも、往々にして聞くのだ、私は他人の家へ談話に行っていて、それを聞いた時もあるので、私は家人に「御宅では、こんなに昼間鼠が騒ぎますか」と訊ねて「いいえ、そんな事はありません」と云う様なことを聞いた事も

度々ある、仮令、それが鼠としても、私の身辺をそう始終鼠が附いて廻るというのも、一つの不思議ではなかろうか、兎に角この事は、自分が十七八の少年時代から、今日までも尚経験しているのであるから、如何しても自分には偶然の出来事として看過することは出来ない、これは一つ哲学者の一考を煩わしたいものである。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

頭上の響

北村四海

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/